

[書 評]

岡 道男著『ギリシア悲劇とラテン文学』（xix+414+16ページ、岩波書店、1995年） 第1部第1章 オイディプースと真実 — ソポクレス『オイディプース王』の劇構造を中心に —

はじめに

2年前に刊行された本書に対してはすでに吉田敦彦氏による書評がある（『西洋古典学研究』44、1996年3月）。また葛西康德氏は本書の第1部第4章「嘆願劇 — ギリシア悲劇にかんする一考察 —」を対象に、書評論文という形で所説を披瀝しておられる（『西洋古典論集』14、1996年9月）。いま評者は本書の第1部第1章「オイディプースと真実 — ソポクレス『オイディプース王』の劇構造を中心に —」を取り上げようとしている。書評という体裁をとる以上、こうした扱いが偏頗で礼を失するものであることは承知の上である。吉田氏の所論に屋上屋を架すことになるかもしれない。ただ本書第1部第1章の『オイディプース王』論は質は周密量は龐大で、ほとんど一本を成すに相当する。吉田氏の書評も、紙幅の関係もあってか、これに十分に触れておられないように見受けられる。いまこれを独立に取り上げて卑見を陳べることも許されるのではないか。

近年本邦ではオイディプースに関する論が再び喧しい。1990年に刊行が開始された岩波版ギリシア悲劇全集で『オイディプース王』を担当された岡教授は、オイディプース像に関して「真実追求者」とする通説を退けて「真実から必死になって逃げようとするオイディプース」という解釈を示された。これが事の始まりである。直ちに藤澤令夫教授から『オイディプース王』730行の前置詞 *πρός* の解釈を中心に反論が提起された（『西洋古典学研究』41、1993年3月）。本書のあとがきによれば、両教授のあいだですでに1992年秋にこの問題をめぐって一連の討論が交されたとのことである。上の藤澤教授の論文はその一つの成果であろうし、また本書の当該論文はそれに対する岡教授の側からの反論であろう。論争が始まった。とすれば再度藤澤教授の側から再反論があつてしかるべきかと思われる。なぜならば、藤澤教授は問題を — そこに端的に集約されているとはいえ — 730行の前置詞の解釈だけにしほって論じておられ、劇全体の解釈にまでは筆を進めておられないからである。岩波文庫

版『オイディプス王』の訳者でもある藤澤教授にはすでにもう浩瀚なオイディプス論が反論として準備されているかもしれない。両教授の論争に口を挿むことは評者の分限を越える。評者はただ、あくまで書評という体裁をとりながら、藤澤教授の再反論が出るまでのつなぎの役を演じるにすぎない。

この論争とは別に、本書と踵を接するようにして先の吉田敦彦氏の手になる『オイディプスの謎』（青土社、1995年7月）が公刊された。これは単に悲劇『オイディプス王』論に止まらず、オイディプスの物語が前5世紀のアテナイという文化的社会的空間でもつ意味にまで言及した労作である。またつい最近、川島重成氏による「『オイディプス王』を読む」（講談社学術文庫、1996年12月）が出た。これまた岡教授のに劣らぬ詳細な『オイディプス王』論である。氏はこれまでもすでに何篇か『オイディプス王』に関する論考を公にされてきているが、それらを一つにまとめ上げ、改めて独自の見解を提示されたものである。当然岡教授の業績にも触れておられるが、瞥見するところ、岡教授の説と相容れぬ立場からの論調が目立つ。

こうした先達たちの驥尾に付しつつ、以下評者も岡教授の論考を読ませていただくという形で、『オイディプス王』について考えてみたい。

論考は全部で12節から成る。順に読み進む。

1 はじめに — オイディプス伝説の構造と『オイディプス王』の劇構造

著者は劇の素材となったオイディプス（以下 Oi.）伝説を4つの要素に分析要約し、これを基本構造とする。すなわち、A 神託（予言）が下りる、B 主人公の将来を告げる、C 主人公は成就を恐れて逃げる、D 逃げることによって神託の実現を招く、というものである。要約すれば、破滅から身を守ろうとして逃げる行為が破滅を招来するということ（ギリシア神話にはこれに類似する物語が数多く見られる）であるが、この構造が『オイディプス王』（以下 O.T.）の劇全体に影響を及ぼしていると思なされる。すなわち悪疫についての神託の報告をクレオン（以下 Kr.）から受けた Oi.は予言者テイレシアース（以下 Te.）を呼び出し、ラーイオス（以下 La.）殺害の真相を尋ねる（伝説構造のA）、Te.の予言 — Oi.の父殺しと母子相姦、盲目と追放（B）、この

予言に対する恐れがイオカステー（以下 Io.）による三叉路への言及を引き出し、ひいては羊飼いの召喚へと至る(C)，結果、Te.の予言は余さず成就する(D)，というのである。伝説上も劇中でも Oi.は神託の成就を恐れ避け逃げようとしている。この〈恐れ〉と〈逃避〉は、以後 Oi.の行動ひいてはその人間性を規定する重要なキーワードとなる。そしてそのために Oi.は「真実追求者」というよりは逆に「真実から逃れようとする者」とされるのである。著者はいう、「例えば Oi.が Te.と Kr.による陰謀を恐れ、確たる証拠もなしに Kr.にたいし死刑を宣告することが、「真実追求者」にふさわしい行為といえるであろうか。それはむしろ Kr.が真相の解明(603-608)を要求するにもかかわらずそれに背を向け、事件の真相を究明しようとせずに手を引く点において、コロスがいう「アポロンの神託を逃れようとする者」にふさわしい行為ではないか」(p.8)。かくして本節では劇全体の構造と主人公 Oi.の人物像がまず提示される。

これに対して評者は以下のように考える。Oi.伝説の基本構造そのものは首肯できる。しかしそれを劇構造として作品に当て嵌めることができるかどうかはいささか疑問である。A, Bの段階はまあよい。問題はCである。果してOi.は神託(Te.の予言)の成就を恐れて逃げ出しているか。彼は Kr.から神託の報告を聞いた直後から La.殺し犯人の捜索に意を燃やしている。Te.の予言を聞いたあとも捜索を中断した様子はない。〈逃避〉の前提となる〈恐れ〉に襲われた色も見えない。Te.から犯人と名指しされて怒った Oi.が王位篡奪の疑いを Kr.にかける行為を著者は予言の成就を避けようとする恐れのもたらす所産であるとするが、これは文字どおり怒り以外の何物でもない。予言は恐ろしい内容を含んでいるが、Oi.の耳には入っていない。彼が示す反応は終始一貫怒りである。もし彼が真に恐れて逃げるのであれば、まず犯人捜索を断念すべきである。わが身に及ぶ害を防ぐに最適の行動であるからである。そうしてこそ劇中の Oi.像はコリントスを退散した伝説の Oi.像に相応する。伝説の基本構造がうまく劇に当て嵌まることになる。しかし Oi.はそうしない。そもそも洩るTe.を執拗に追及して口を割らせたのはその旺盛な知的好奇心である。劇中の彼は逃げる男ではない。追う男である。

第1スタシモンでコロスのいう「デルポイの神託を逃れんものとあがく」のは La. 殺害犯人(コロスはそれが Oi.であることはまだ知らない)を指す。少くともコロスの意識では、それは国主 Oi.ではない。Oi.はアポロンの神託の命ずるままにそれを追跡する者なのである。われわれはコロスよりも知識があ

る。それゆえここに悲劇的アイロニーを感得しうることは否定しえない。しかしここでは Oi. を追跡される者と知りつつも、また追跡する者でもあることを忘れてはならないのである。コロスもそうであるが、Oi. 自身が自分は伝説の Oi. のように逃げなければならない状況にあるとは思っていないのである。思っていれば犯人捜索は断念されよう。彼はまず追いかける男として認識されなければならない。

Kr. の真相解明要求を座視するのも怒りのためである。Oi. は決して完璧な人間ではない。一時の感情で大局を見誤ることもある。迷妄から脱しきれないふうの人間である。そういう人間として作者は描いている。Kr. の要求を容れなかったからといって、直ちにそれが「真相究明から手を引く」ことにはならない。意識してそうしているのではないからである。真実追求者すなわち完璧な人間という見解は、評者はとらない。

2 アポローンの神託

実の両親について Oi. がアポローンの神託を求める行為は、著者のいうように「Oi. にとっては、人間であれば誰もが願うように、自分が何者であるか知りたいと望んだことが悲劇の始まりであった」(p. 9)。これに異存はない。自らのアイデンティティを求める行為は〈真実追求〉に添うものであろう。このあと Oi. は逃げ出すが、その前にこうした真実追求の願いがあったことは留意しておく必要がある。

悪疫駆除を祈願する二度目の神託伺いとそれに伴う犯人捜索については、著者は Dodds のような単なる「敬虔な心と正義感」に促されてのことではなく、自分自身のためでもある(cf. 137-141) とし、「それは Oi. が将来未知の犯人が「その魔手を伸ばしてくる」ことを恐れ、わが身を守ろうとして発した呪いが、まさにわが身にふりかかってくるからである」と記す(p. 11, 下線評者)。ここで著者は Oi. の心中に〈恐れ〉を読み込み肥大化させようとするが、やや強引な感を否めない。〈恐れ〉を表す語はない。もし〈恐れ〉を読み取るとすれば、それは La. 殺害に始まる王位篡奪の陰謀に対するものであって、それはむしろそのような不埒な行為への〈怒り〉と置き換えてもよいものである。それゆえにこそ彼は犯人追及に専念する。犯人検挙は己のためにもなるのである。これは己が La. 殺害犯人かもしれぬというのちの恐怖感と連動する類のものではない、と評者は考える。

3 テイレシアースとの場面 — 逃げる牡牛

著者はアポローンの最初の神託と Te.の予言との間に共通項を見出そうとする。すなわち、いずれもこちらが尋ねた質問に答えず“ないがしろ”にしたあげく、結局は“まったく予期せぬ、意外なこと”を告げるという。「このような一致が過去の神託の物語と、Oi.と Te.の場面との間に認められるのは、ここに Oi.伝説の基本構造が反映していることを示唆するように私には思われる」(p.14)。しかし仔細に見ればこの一致点は少し怪しい。神託は尋ねたことには答えず、まったく別の事象(父殺しと母子相姦)を告知するが、Te.は渋りこそすれ質問には答えている(犯人の名)。これは果して〈一致〉であるか。同時にそれぞれの回答が Oi.に及ぼす影響も、一は驚愕と恐れ、他は怒り(cf. 364)と、相異なる。最大の違いは、一がこれから起ることを告げるのに対して他は知らぬうちに生じていた事象の露見を示唆することであろう。

また著者は、La. 殺害の犯人がやがて Oi.に魔手を伸ばしてくるのではないかという不安と恐れがやがて予言者の有罪宣告(とそれが伴うであろう刑罰)にたいする恐怖に転じるという(p.15)。ここにいう恐怖とは、454行以下のTe.の捨て台詞が Oi.の心中に喚起した(と思われる)ものを指すと思われるが、これは単なる推測に過ぎない。Oi.は一言も恐怖を口にしていない。もし恐怖に転じるのであれば、このあとの第2エペイソディオンで彼は Kr. に対してあれほどに怒るであろうか。いま Oi.の心中にあるのは、ただ王位篡奪の奸策をめぐらすいかさま師 Te.への怒りだけである。

さらに著者は言う、「ここで繰り返される「Oi.の死刑または追放」(658-59, 669-70)は、Oi.が Te.を「いかさま師、詐欺師」と罵ったものの、予言者の有罪宣告と、それが必然的に伴うであろう刑罰(死刑か追放)をきわめて深刻に受けとめていることを示している」(p.16)と。この箇所を、評者は Kamerbeekと同様に、単に王位篡奪による政権交代を意味するだけのものと考ええる。政権欲のためにクーデタを起され、La. 同様に殺され、この地の覇権を奪われてもよいものか、かつてこの地を救ったこの私が La.殺しの濡れ衣を着せられて王位を追われてもよいものかと、Oi. はコロスに訊いているのである。La.殺しの自覚のない Oi.に事態を深刻に受け止める余地はない。ここにあるのは死刑と追放への恐怖よりはむしろクーデタへの、己の統治に対する叛逆への怒りである。

さらにまた著者は、この箇所に関連して注(34)で以下のように述べている。

「T.v.Wilamowitz (81) , Dawe (15) は, Io.が神託(または予言者の言葉) の真偽を問題にするまで, Oi.は Te.の言葉が真実である可能性をまったく考えていなかったというが(評者もそう考える) , とすればなぜ Io.がここで Oi.の恐怖を払いのけようとして La.への神託と三叉路の話をするのか説明できないであろう(Wilamowitz も Daweも Oi.によって繰り返される彼自身の「死刑か追放か」の意味を見落としている)」(p.97,下線評者) . Io.は Oi.の恐怖を払いのけようとしたのではない. 怒り(μῆνιν 699) を払いのけようとしたのである. その怒りのために Oi.は近視眼的になって, Te.の言葉に充分注意が向けられなかったのである. それでなくても Te.の言葉は謎めいていて理解しにくい(cf. 439) . もしその“真実の可能性”に気づいておれば, 恐れに駆られて何らかのリアクションをすでに示していたであろう. 序でながら688行の「わたしの心を弱め鈍らせている」と訳されている「心 κέαρ」は「怒り」の意である(cf. Campbell, Kamerbeek, Jebb) . Oi.はコロスに向かってわが怒りをおまえたちは正当にわかってきていないと言っているのである.

著者は予言者 Te.をアポローンによって遣わされた存在, その代理者と考える(278-79行に付けられた翻訳脚注参照) . 神託は犯人の搜索を命じるが, 犯人の名前は明かさない. 犯人名を告げるのは Te.である. しかしこの神託と予言の二重構造にこそこの劇の存立理由がある. アポローンが真犯人の名を告げれば, Oi.は驚き恐れて逃げ出すであろう(この点, 過去の神託の場合と同じ) . しかしそれでは劇は成立しない. 予言者 Te.は神の代理人としての側面と同時に, 神ならぬ人間という側面も有する. それゆえにこそ Oi.はその告知するところに反発し怒るのである. 反発ゆえに事態は錯綜し, 犯人捜しこそが劇の目的となる. Oi.は逃げる男ではない. 追う男である. 実際は逃げる男であるが, いまは追う男なのである. 自分が逃げる男, 追われる男であることに気づくのはもっとあとになってからである.

4 クレオンとの場面

「ここでは彼は Kr.の真相究明の要求(603-604) を無視し, 一片の証拠もなしに Kr.に死刑の判決を下すことによって, 結果として, 事件の真相に背を向け, その究明から手を引いている」(p.21) と著者はいう. Oi.は完璧な人間ではない. 常に冷静な Oi.を求めるのは無い物ねだりである. ここの Oi.は怒っている. たとえ個々の行為に真実追求にもとる点が見られることがあっても,

それは人間のなすことには限界があるということの証拠に外ならない。犯人追及にかける Oi.の意志に変わりはない。

また著者は「王による一方的な非難にたいして Kr.が質問を許してほしいというとき、Oi.は「尋ねるがよい。だがわたしが (La.の) 殺害者として有罪になることは決してないだろう (οὐ γὰρ δὴ φονεὺς ἀλώσομαι)」(576) という。この言葉は、Oi.が Te.による有罪宣告を恐れ、それから逃れようとしていることを明らかに示す」(p.21-22) と記す。評者には、576行は有罪宣告への恐れではなく、Oi.の満々たる自信を示すもののように思われる。

また著者はいう、「アポローンとケーレスによって追われる男、アポローンの神託を逃れんものとあがく牡牛は、現在の Oi.の姿にほかならない」(p.22)。Oi.には逃げているという意識はない。追跡していると思っている。この追いかける姿を看過してはならないであろう。

5 イオカステーとの場面

「この個所について注目すべき点は、Oi.が Te.の有罪宣告を恐れてそれから逃れようとするのが、Io.の慰めの言葉を引き出し、これによっていっそう確実に彼を破滅へと導くという構造、すなわち Oi.伝説の基本構造が認められることである」(p.23) と著者は記す。言葉尻を捉えるようで恐縮であるが、評者ならこう書き替えたい、「この箇所について注目すべき点は、Oi.が Te.の有罪宣告に反発し怒ることが、Io.の慰めの言葉を引き出し、その中の〈三叉路〉なる語によって彼の心中に突然疑惑を生ぜしめること、すなわちここはいわゆるペリペテイアの場とはなりえても、ここに逃げることによって破滅を実現するという Oi.伝説の基本構造なるものを認めることはできないということである」と。

Oi.はここで初めて自己に目を向ける(自らの殺人事件の想起)。犯人捜査は外部から内部へと方向転換される。犯人は当然自分以外の人間と思っていたのが、自分かもしれないと思いはじめるのである。著者は、Oi.はこの場面で突然「真実追求者」に変容したことになるといふ。Oi.は神託から逃れようとしているという前提に立つかぎりにはそう思われようが、しかし彼は決して神託から逃げてはいない。神託の命ずるままに真犯人の捜索を続けている。ただ〈三叉路〉を分岐点として、その捜索の方向が外部から彼 Oi.自身へと向けられただけなのである。それを突然といってもよいし、劇的転回といってもよい。

さて〈三叉路〉にまつわる問題である。著者はLa.殺害の場を示す前置詞 $\epsilon\nu$ (716) と $\pi\rho\acute{o}\varsigma$ (730) との使い分けに着目して、ここにO_i.の心理的揺らぎ、すなわち犯人と特定されることを出来るだけ避けようとする〈恐れ〉と〈逃避〉を見て取ろうとする。この条りは先に挙げた藤澤教授の論文を充分念頭に置いて書かれたものと思われるが、しかし前置詞 $\epsilon\nu$ と $\pi\rho\acute{o}\varsigma$ の使い分けの説明は評者にも納得できるものとは言い難い。 $\epsilon\nu$ と与格、 $\pi\rho\acute{o}\varsigma$ と与格がほぼ同じ意味をもつことに関しては藤澤教授の論証に譲る。評者はそれに従う。たとえば $\epsilon\nu$ と $\pi\rho\acute{o}\varsigma$ が異なる意味を担うと仮定しても、それは著者のいうようにO_i.の心の揺らぎ、恐れによる逃避を示すものではない。それはむしろIo.の誤りを訂正する(無意識のうちに)類のものであると思われる。なぜなら評者は810行の「三叉路の近くで $\pi\acute{\epsilon}\lambda\alpha\varsigma$ 」こそ、殺害場所の正確な表示であると信じるからである(cf.1399 $\sigma\tau\epsilon\nu\omega\pi\acute{o}\varsigma$)。著者はいう、「彼は間接話法においては $\epsilon\nu$ を使うけれども(ただし後述するように「場所」は曖昧な複数形であらわされている)、直接話法すなわち自分の言葉を語る時は $\pi\acute{\epsilon}\lambda\alpha\varsigma$ を用いて事実に直接ふれることを避けている。ここでは上述の $\epsilon\nu$ と $\pi\rho\acute{o}\varsigma$ のコントラストに見られたのと同じ心理的ためらいが認められる。〈略〉彼らがO_i.に出あったのは三叉路の中においてであって、その近くではない」(p.26. 下線評者)。

ここにいわれている〈事実〉とは何か。噂 $\phi\acute{\alpha}\tau\iota\varsigma$ に基づくIo.の情報果して事実を告げているか。事実を告げているのは、その場に居合せたO_i.の語る $\pi\acute{\epsilon}\lambda\alpha\varsigma$ の方ではないか。「三叉路」という一語を聞いて驚いたO_i.はいま事実確認を急いでいる。まだ犯人と決まったわけではないから事実をごまかす必要はない。「事実を告げよう」(800)の言葉どおり、彼は過去を思い出し、ありのままの事実を曝け出していると考えられる(800行を後世の挿入としてもこの間の事情は変わらない)。著者は $\epsilon\nu$ を $\pi\rho\acute{o}\varsigma$ に言い直すことがO_i.の激しい興奮をあらわすというが(p.25)、興奮していれば言い直すだけの冷静さはないとみるのがふつうではないか。O_i.はLa.殺害の情報はずでにKr.から得ている。ただその場所は(作者によっておそらく故意に)明らかにされなかった(112以下)。三叉路という殺害場所はIo.の口から初めて明らかにされるのである。これがすでにKr.によって明らかにされた既知の情報であれば前置詞をいかようにでも使って言葉の詐術を弄せたらう。

そもそも「三叉路の中において」両者の衝突が起るものか。三叉路の中($\epsilon\nu$)とは三つの道の合流点ということであろう。そこでは衝突は起りえない。第3の道が退避路になるからである。これだけでもIo.の噂による情報は

正確でなかったことになる。三叉路の近く(πέλας)の一本道でなら衝突は起る。「三叉路」という語を聞いて Oi. が πρός と前置詞を変え(もし ἐν + 与格と πρός + 与格とに違いを認めていて), πέλας と言い直したのは、無意識のうちに不正確な Io. の情報を訂正したことになる。このあたり、評者は大西論文(大西英文「『轍』路とオイディプスの悲劇(下)」『古代文化』34-12, 京都, 1982年)を念頭に置きつつ論じている。評者にもまた「三叉路」はアナグノリシスのための単なる符丁にすぎないと思われる。著者は注(49)で、大西論文に触れて「しかし πρός, πέλας は作者による(伝承の)合理化のあらわれというよりも, Oi. (登場人物)の心理(恐怖と不安)そのものをあらわすとするほうが劇解釈としてより自然であろう」(p.99)という。ἐν から πρός, πέλας への移動に Oi. の心理を読み込む業は細密だが、また細密に過ぎるともいえる。ここで作者が意図しているのは、三叉路という語を出すことによって Oi. に初めて自己に目を向けさせることである。先述したように、Kr. は La. 殺害に関してその場所は明示しなかった。いま Io. が初めてこれを口にする。これまで犯人捜索を自分以外の領域に求めていた Oi. がこの語をきっかけに己自らに疑惑の目を向け始める。まさにこの一語がペリペテイアを成すことになる。乱暴な言い方をすれば、付く前置詞は ἐν でも πρός でもかまわない。副詞の πέλας でもよい。問題は「三叉路」の一語である。「三叉路の中で衝突する」というそれ自体に矛盾を含む言い方そのものが、却つてこの三叉路なる語が単なる符丁であることを示していよう。ただ Oi. は、「実際はその近くなのだが」と訂正——結果として——しているだけのことなのである(ここに大西論文のいう如く作者による伝承の合理化を読み取ってもよい)。

Io. の情報を一つ一つ問い質していく Oi. を評して著者は「彼は真実を明らかにすることを求めているというより、むしろ個々の質問にたいし、自分の過去の記憶とは異なる答えが与えられることを期待して、すなわち自分が無罪となる手がかりを求めて、次々と質問しているのではないか」(p.30)といい、最大の論点である犯人の数の問題に関しても、Te. ではなく未知の羊飼いの証言に頼ろうとしていると指摘し、「(もし Oi. が) 真実を突きとめようと望むならば、Te. を再度呼び出して犯人の確認を求める、あるいはその証拠を求める以外の方法は考えられないであろう」(p.34)という。無罪を求めて質問することが真実追求にもとる行為とは言えない。また唯一の生き証人を召喚することは決して“逃げる”ことにつながらない。羊飼いがどんな証言をしようと、とにかく彼に会い、互いの情報を突き合わせて事実の確認を求めたいとするの

は真実追求者として自然な行為であろう。このとき Oi.の心中には、訊く相手を Te.とするか羊飼いとするかという二者択一の選択肢はない。劇はそのように作られている。Te.に訊かないのは怪しからんというのは、劇として見ることを拒否することになる。Oi.はそういう事実の求め方をしているのではない。劇場で法廷弁論を求めてはならない。

「彼は Te.の有罪宣告(とそれに伴うであろう追放)を逃れるために羊飼いの男を呼び出すことによって、それとは気づかずに自分を破滅の淵に導いている。ここには、かつてアポローンの神託の成就を避けようとして逃れた(796: ξφευγον)ことが、La.の殺害を招くことになったのと同じ構造(すなわち Oi.伝説の基本構造)が認められる。劇の前半と後半を結びつけているものはこの基本構造にほかならない」(p.36)。Io.の「三叉路」の一言が Oi.の心中に不安感を生ぜしめたことは確かである。いまや彼は己の置かれた状況に気づき始める。恐れ始めたといってもよい。しかし羊飼いの証言に無罪証明を求めようとするのは決して“逃げる”ことではない。彼にはその意識はないし、置かれた状況からしてごく自然な行動でもある。ただ己への疑惑を晴らしたいがために生き証人の証言を求めようとするだけである。ここで羊飼いを召喚せず放置したままにでもしておけば、それは“逃げる”ことになろう。

また Oi.の破滅が神託への恐怖と逃避という伝説構造のパターン化だけで律し切れないことは、このあとのコリントスの男の場面からも察せられる。彼の証言は Oi.の破滅に大いなる力をもつが、それは Oi.の恐れとは無関係な劇の外側からの新しい情報である。彼の登場は伝説構造のどこに位置づけられるのか。

6 コリントスの男との場面

コリントスの男がポリュボスの死を告げる。著者は、これを Oi.と自分を Te.の有罪宣告(とそれが伴うであろう追放)から解放してくれるものと Io.はみなしているという(p.39)が、果してそうか。これは単に Oi.のアポローンの神託(父殺しと母子相姦)からの解放を示すだけではないか(cf.946以下)。La.殺害の疑惑、恐怖は、ここでは棚上げになっている。

同じくコリントスの男がメロペーは Oi.の実の母でないことを告げる条りをとらえて、著者はまた次のようにいう、「ここで注目すべき点は、Oi.がメロペーにかんする神託の成就を恐れ、それを避けようとするのが、Oi.のかつての身分(捨て子)を明かすことになるという形である。これは Te.の有罪宣告に

たいする Oi.の恐怖が、La.への神託と三叉路の話をIo.から引き出したときと同じパターンである」(p.42)と。前半部分はいまよく当て嵌まるようである。しかしそうした末梢部分の相似よりも、ここはコリントスの男の劇中での役割を考慮すべきであると思われる。Io., Oi. 両者はそれぞれに下った神託を開示しあう。二つの神託は酷似しているが、Io.は赤子は死んだものと思い、Oi.は育ての親を実の親と思い込んでいるがゆえに、同じ神託の当事者同士であるとは夢にも思っていない。ただ二つの神託は「三叉路」の一語で互いに交叉する。そこからまず Oi.に自分は La.殺害犯人ではないかとの疑念が生じ、彼はその真偽の追及に夢中になる。次いでコリントスの男が登場し、ポリュボスの死とOi.は捨て子でポリュボス、メロペーの実の子ではないことを告げる。赤子が生きていたことを知った Io.は神託の成就を悟る。Oi.は、ポリュボス、メロペーが実の親でないことを知った時点で神託の成就を悟ってよさそう——神託どおりなら妻は母のはず——なのに悟れず、羊飼いの登場まで劇は進んでいく。怒り同様、驚愕が彼の知性＝目を曇らせている。いま Oi.の中では La.殺害犯人の件は等閑に付されている。ルーツ探究に躍起である(1058-59)。Oi.はつねに目先の問題にしか関心を示さない。否、示せないのである。

前言にいささか反するが、ここで Oi.は薄うす自分の出自に気づき始めていると解せるかもしれない。作者はここで故意に明晰ならざる Oi.像を提示した。劇としての形づくりのためである。羊飼いの審問の場は作られたクライマックスである。少くとも著者のいうような、今度こそ確実に神託の成就を逃れるために新たに実の両親を捜し出す、その捜索の一環として羊飼いの審問の場が設定されているのではなからう。この期に及んで両親を新たに捜し始めるほど Oi.は呑気ではない。とまれここで注意すべきは、Oi.の秘密の露見は決して“逃げる”ことで実現するのではないということである。Io.が神託の成就を知り、ひいては Oi.も自らの秘密を知ることになるのは、まさにこのコリントスの男の情報によるのである。これは劇の途中に挟まれた劇の外からの情報である。Oi.の〈恐れ〉と〈逃避〉とはまったく無関係である。

〈三叉路〉に発する疑惑からも秘密の露見は必須であったろう。羊飼いの召喚は予定されていたからである。しかし作者はここでコリントスの男を導入することによって、La.殺害犯人の捜索よりも Oi.のルーツ捜し、すなわちアポローンの神託成就の方を優先させた。逆にいえば、アポローンの神託成就、その露見はこのコリントスの男の報告という劇の外側からの要素によって初めて実現するのである。Oi.が逃げたからではない。

7 羊飼いの男との場面

「しかし彼がなおも質問を続けることは、館の中のIo.によってすべての事実が確認されるまで、彼が羊飼いの男の言葉を半ば信じ、半ば疑っていること、いいかえれば神託(とTe.の宣告)を逃れる望みを完全に捨てていないことを示唆する」(p.56)。

ここは1171行以下もまだ Oi.が質問を続けることの意味を論じている箇所である。評者の見解は著者のそれと異なる。1171行以下は補足的質問とする Daweの見解にやや近いが、要するに Oi.の真実追求の態度を最後まで見せるため、すなわち Oi.は決して明察ではないことを示すためであると考え。本来ならメロペーが実母でないことが判明した時点で悟ってしかるべきことが、引き延ばされているのである。

8 神託の成就

「Oi.が目をつぶすのは、彼が引き起こし、彼自身がこうむった禍いゆえに、自分のまわりのものを見ることに耐えられないからである。彼は自殺することも、この世において生き続けることもできないゆえに、自ら目をつぶす道しか残されていない」(p.60)。

評者の思うところを付け加えたい。他人のことはよく見えるくせに自分の置かれた状況を的確に認識できなかった——見るべき人が見えなかった——目＝知性への懲罰として、Oi.は目をつぶすのである。目をつぶして放浪の旅に出ることはアポローン(Te.の予言)によって決められていた(454-56)。あとはいかにそれを自覚的また主体的になすかの問題である。目をつぶすことは前から決まっているが、その理由づけは専らOi.の主体性にかかっているのである。

9 『オイディプース王』の基本構造

著者は Oi.伝説の基本構造 A, B, C, Dは O.T.においてほとんどそのまま繰り返されているとしたうえで (p.64), 「Oi.伝説において神託が実現し, Oi.がすでに破滅している(すなわち(D)が生じている)にもかかわらず, 彼がその事実に気づいていないゆえに, O.T.において改めて Oi.伝説の基本構造 (A) (B) (C) (D) が繰り返され, Oi.の過去の行為にたいし, その結果が示される

ことになったと私は考える」(p.67)と結論づける。

果して伝説の基本構造 A, B, C, Dは劇中でそっくり繰り返されていたろうか。本論のキーワード〈恐れ〉はそれほどに一貫して劇中に見られていたか。Te.の予言が Oi.に及ぼすものは怒りであって、恐れではない。〈恐れ〉は、観客も含めた部外者には感得されるとしても、Oi.自身には看過されている。もしここに〈恐れ〉があるとしてもそれは王位篡奪者に対する政治的色彩を帯びたものであろう(cf.560)。それは〈三叉路〉が引き起す恐れとは次元が異なる。恐れといっても一律ではない。また神託の La.殺害犯人搜索命令と Oi.によるその実行は劇中に無視できない比重を占める。これは伝説構造のどの部分に相当するのか。Oi.は逃げてばかりいるのではない。

すでになされた犯罪行為をいかにあとから認知するか、その過程がこの劇であるが、そこにいるのは見てはいながら見えていない目で悪戦苦闘する Oi.の姿であって、伝説の基本構造に乗っかって逃げる Oi.ではない。背景の伝説は伝説として、まず舞台上の劇を劇として観なければならぬ。そこから全てが始まる。評者はそう考える。

10 オイディプスの罪とオイディプス伝説の構造

「私は、過去において神託が下されたときと同様に、O.T.において Oi.が Te.の宣告(それは過去の神託にひとしい)を恐れたことが、重要な局面において判断の誤りを招いたと考える」(p.77)。評者は下線部をテキストに添って「怒ったこと」と直したい。しかしそうすると前後の文脈の整合性が失われる。伝説の構造を劇に読み込むという前提が考え直されるべきであると考え。

11 ソポクレスによる伝承の改変について

「上述(1～10節)のように O.T.において、Oi.伝説の基本構造が繰り返される形であられるのが認められた」(p.78)。果して認められたろうか。

12 終わりに — オイディプスと真実 —

「この劇において描かれている Oi.は「真実追求者」説が想定しているような「偉大な真実追求者」ではなく、アリストテレスが悲劇にふさわしい人物と

してあげていた「われわれに似た人間」なのである」(p.83)。

「ここで浮かび上がるOi像がソポクレースの他の作品の「英雄」像と著しく異なるのではないかという反論が予想されるが、ソポクレースが彼の現存の作品において取り上げたのは、運命がもたらす限界状況におかれた「人間」であって、いわゆる「英雄」ではないと私は考える」(p.85)。

Oiがいわゆる英雄ではないという点には評者も賛成である。ただし“逃げている”からそうでないというのではない。逃げずに悪戦苦闘しているがゆえに英雄ならぬ人間らしい人間だというのである。彼はやはり真実追求者である。ただし「偉大な」という形容辞はつかない。ごくふつうのさして明晰ではないが、一途な真実追求者である。

思うに、著者はOi伝説の基本構造を劇O.T.に読み込もうとして、Oi像およびその行動を“逃げる”という現象ですべて説明しようとした。そのためにしばしば劇の実際面とその説明とが齟齬を来す場面が生じているように思われる。著者が“逃げる”行為と見なすものは、逆に評者にはほぼ真実追求の行為と見える。Oiに恐れや迷いがないわけではない。だが恐れ迷いながらも彼は真実を追求しているのである。これは“逃げる”とはいわない。

われわれ後世の読者は劇の背景である伝説は先刻承知している。当時の観客もすべてではないにしろそうであったろう。その上で読んだり観たりするわけであるが、個人的鑑賞はさておきこれを公に論じる場合には、そこに自ずと越えてはならぬ限界というものがあるであろう。つまり劇中に、われわれにはもつことを許されている予備知識を限度を超えてもち込んでならぬということである。劇は劇として虚心にまず観ることから始められなければならない。劇と伝説との関係を説明することが必ずしも劇の解釈になるのではない。この点は、この劇を真実追求者説の立場に立って読もうと、真実逃避者説に則って読もうと、同じことである。

著者の博搜、細部の丁寧な分析に驚嘆しながら、結局評者は著者の論旨に賛成できなかった。それは〈恐れ〉と〈逃亡〉に対する著者のいささか過剰な思い入れについていけなかったためであるが、つきつめればすべては“初めに伝説の基本構造ありき”という著者の立論の拠点、基本的立場の認否如何にかかっている。

以上の小文を脱稿したのは1997年2月のことであった。諸般の事情から印字するのが遅れて今日に及んでいる。その間にまた『オイディプース王』について考え議論する機会があった。そこで得られたものを、上と重複するかもしれないが、補足意見として付け加えておきたい。

1) 伝説の基本構造Cの段階(神託の成就を恐れて逃げる)の劇中への適用の度合いの弱さは上に指摘したとおりであるが、A(神託あるいは予言)、B(主人公の将来の告知)の両段階も劇中には必ずしも分明に現れていないのではないか。Te.の予言をそれに擬するのではいささか弱いと思われる。上でも述べたが、Te.の予言は二度目のアポロンの神託と連動しく(託宣)の二重構造をなすことで意味をもつのではないか。Oi.は神託には従うがTe.の予言には反発する。この反発——恐れではなく——が以下の劇を作る。

2) 繰り返しになるが、基本構造Cの段階は劇のどこに見られるのか。劇前半のOi.(少くとも話が〈三叉路〉に及ぶまでの)は、自分の殺害事件を完全に忘却している。少くとも彼自身は神託のいうLa.殺しとは全く無関係であると思っているとみてよい。自己の行為に臆するところをもたない人間は恐れることをしない。そういう人間が突然犯人呼ばわりされたら怒るのは当然である。しかもその託宣は神の口から出たものではない。人間の口から出たものである。反発は当然である。〈三叉路〉に至るまでのOi.の全身を支配しているものは、決して〈恐れ〉ではなく〈怒り〉であるということをいま一度強調しておきたい。

3) 〈逃げる〉というのは〈積極的回避〉と言い換えることもできるのではないか。La.が赤子Oi.に施した処置も、Oi.のコリントス出国も、神託の成就を避けるためになされた最善の回避策であった。それを〈逃避〉ととるか〈積極的回避〉ととるかは、当人の人世の処し方を能動的積極的なものとみるか逆に受動的消極的なものとするかによってくる。当然解釈するわれわれ自身の考えもそこに反映する。Oi.の場合、少くとも劇中のそれに受動的消極的な姿を考えることはむつかしいと評者には思える。一見逃げるように見えても、それは積極的回避というべきもので、元来Oi.は前向きな人物像に設定されているとあっていいのではないか。

4) 再び *έν, πρός, πέλας* について(この場合、*έν* と *πρός* は同義でないとは仮定する)。噂の真実となるべく離れたたい、己の事件との間に距離をおきた

い、すなわち両事件は別件としたいというのなら、*ἐν* (噂の事件の場の描写) を *πρός* (同じく噂の事件の場の描写, *Io.*の言の確認) と言い換えたりしないはずである。*πρός* の場は *ἐν* の場を離れ、*πέλας* の場に近づくからである。*πρός* と言い直さず、*ἐν* をそのまま認め、それと *πέλας* (自分の事件の場の描写) を対置させ距離をおくことで、両者は別事件を描写するものとなるはずである。*ἐν* を *πρός* に言い換える行為は、真実の場から離れたいと心の揺れ、逃避を一見示すようであり、却って本来の趣旨に反するものになってしまう。*πέλας* との距離を拡げなければならないのに、却って近づけてしまうのである。

噂の事件の場の描写を *ἐν* から *πρός* に言い換え、その間に距離をおき、本来の場を曖昧化しぼやかすことによって効果あるのは、自分の事件もまた *ἐν* で描写できる場合のみである。しかるに *Oi.* は自分の事件の場を *πέλας* と描写している。

逆にこう考える方が自然ではないか。つまり *ἐν* を *πρός* に言い直し、ひいては *πέλας* とまで言うのは、ひょっとして両事件は同一のものかもしれないという *Oi.* の〈驚きと恐れ〉を表示するものということである。*Oi.* は *Io.* の提示する情報を自分の事件に引き寄せて考えているのである。それは真実から逃れようとするものではなく、逆に真実に近づけよう (自虐的に?) とする行為 (事実確認) である。このときもちろん *Oi.* は実際に自分の事件のあった場所を「三叉路の近く *πέλας* 」としているのである。

5) 伝説の基本構造のとおり、すなわち父殺しと母子相姦をそのままリアルタイムで劇化するならば、逃げることによって神託を成就する *Oi.* 像が展開されたろう。しかしソポクレスが劇にしたのは事件後の *Oi.* の姿である。思わぬきっかけから己の過去 (逃げた自分) を覗く姿である。きっかけは先王 *La.* 殺害犯人の捜索である。彼は追跡者としてまず出発する。途中にはさまざまな障害があり、その都度恐れやとまどいや非能率ぶりを示すとはいえ、〈追跡者〉の姿は最後まで一貫している。決して明晰とはいえない追跡者、しかも途中からは自らの影の追跡者、それがこの劇の *Oi.* であるといえまいか。

伝説の *Oi.* と劇中の *Oi.* とのいちばんの相違点は〈逃避あるいは回避〉の意識の有無である。劇中の *Oi.* はそれを欠くがゆえにさまざまな曲折を経ることになり、それが自己発見の劇を構成することになる、のではあるまいか。

(1998年1月17日)

丹下和彦(大阪市立大学)